

## 9 校内研修

### 1 研究の主題

#### (1) 研究主題

「学ぶことの大切さと楽しさを知り、主体的に学ぶ児童の育成」  
～「言語活動」が有効に機能する授業づくり及び生活・学習の基盤づくりを通して（案）～

#### (2) 主題設定の理由

##### ① 今日の教育課題より

知識基盤社会といわれる現代において、課題を見いだし解決する力、生涯において学ぼうとする態度など、社会の変化に対応する能力が求められている。改訂学習指導要領は、こうした時代に対応する能力として「生きる力」の理念を継承し、その実現に向けた具体策を示したものとなった。

学力の重要な3つの要素として「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」が明確化されている。これは、知識・技能を身に付けるだけではなく、それらを活用するための能力やそれらの力を十分に発揮するための学習意欲などをバランスよく向上させていく必要があることを示している。

めまぐるしく状況が変わる社会にこれから出て行く子どもたちに、自分自身で課題に気づき、経験を活かして主体的に考え、判断し、行動する力を付けること、さらには、自分自身でそうした能力を高めていこうとする力を付けることが、学校教育に求められている。

##### ② 本校教育目標より

本校の教育目標は、「今と将来に『生きて働く力』を身に付けた子どもの育成」であり、地域力を基盤に、学校力、人間力、教師力、家庭力が子どもに注がれることにより、一人一人の子どもに「生きる力」が育まれる、本校ではこれを「生きて働く力」と換えて目標としている。

「生きて働く力」とは、学習したことが実生活の場でより有効に活かされることであり、活かすことができる場面を思考したり、判断したり、表現したりする力のことである。こうした力を付けるためには、確かな学力をつけることはもちろん、自尊感情を高め、良好な人間関係の中で成功体験を積み重ねることが必要であると考えられる。

この教育目標を具現化するために、学ぶことの大切さを知り、自ら学ぼうとする態度や学ぶ方法を身に付けることで、学ぶことの楽しさや価値を体験的に見出すことのできる児童育成を目指すものとして本主題を設定した。

##### ③ 児童の実態より

一人一人の児童は、素直で快活であり、できることには一生懸命取り組もうとする。

しかし、自分の考えを人に伝えたり他者との良好な関わりを築いたりすることが苦手であったり、集団として規律を守ることが苦手であったりする傾向が見られる。

「標準学力検査」の結果を見ると、学力偏差値は、学年差はあるものの一定の水準まで達しているが、学力成就値は経年低い傾向にあり、特に、男子は顕著である。平成23年度より、全体ではプラス値になったが、学年別に見ると、低学年はプラス値だが4年以上の高学年はマイナス値である。また、男女別に見ると、どちらもプラス値であるが女子が男子を大幅に上回っている。

「県学力調査」の結果を見ると、県平均を上回る領域が昨年度よりは減り、教科や学年の差が見られるのが特徴である。また、質問紙調査結果を見ると、「勉強は楽しいか」「自分から進んで勉強するようにしていますか」「勉強はおもしろい。楽しいと感じることがありますか」の項目で、県との比較で2学年以上がマイナス値である。

こうしたことから、個に応じた指導や発達の段階を考慮した系統的・計画的な指導を行うとともに、自尊感情を高め、望ましい人間関係づくりにつながる学習活動を展開する中で、学ぶことの楽しさを味わわせ、進んで学習する態度を身に付けさせる授業改善に取り組む必要があると考える。

### (3) 主題について

#### ① 「学ぶことの大切さと楽しさを知る」とは

児童が学ぶことの意義を実感しもっと学びたいという意欲を持つことである。学習したことがその場で分かることはもちろん、別の場面や自他において、学んだことが活かされたという有用感を感じることを通して、児童が学ぶという行為を肯定的に受け止める姿を指す。

#### ② 「主体的に学ぶ」とは

基礎的・基本的な知識及び技能を習得した児童が、それを活用して課題解決を行うこと、また、行おうとすることである。既習事項や社会規範など客観的な根拠を伴う自分なりの考えを持ち、学習活動や実生活での思考、判断、行動につなげていく。さらに、その行動を振り返り、次の思考や実践につなげるというサイクルによって高まっていく児童の姿である。

#### ③ 「言語活動」と「授業づくり」「生活・学習の基盤づくり」について

ア 「児童に対する意識調査」や教育反省等を踏まえ、また、今年度は、初任者研修として全職員が授業公開することから、昨年度、国語科で研究し実践を試みてきた言語活動を全教科へと広げる。また、児童の発達の段階に応じた学習指導の内容や方法の工夫をしながら教職員一人一人の持ち味を発揮する授業づくりを核として、「全員授業研」「学期毎の大研」を行う。

イ 児童が学習内容を確実に習得したか、活用する力を身に付けたか、主体的に学ぶ意欲が身についたか、などを適切に把握するために、「評価」の在り方を学習評価・授業評価から研究・実践を深め、目標・指導と評価の一体化を図る。

ウ 児童が、学級や学年、縦割り班など様々な集団の中で、多様な集団活動や人間関係を体験することを通して、自己存在感や自己有用感を実感できる機会を創意工夫する。

同様に、家庭や地域社会との協働による教育活動にも積極的に取り組み、社会での生活につながる基本的生活習慣や規範意識の育成にも努め、授業づくりの基盤としたい。

## 2 研究の仮説

**仮説1** 児童の実態を分析・把握をし、「言語活動」が有効に機能する授業づくりを行えば、児童が学びとつながり、主体的に学習に取り組むことができる。

**仮説2** 授業や生活を通して、集団への所属感や自己有用感を高める活動や機会を工夫すれば、児童が自己や他者とのつながりを深め、学ぶことの大切さや楽しさを感じられるようになる。

**仮説3** 家庭との連携により基本的生活習慣や学習習慣の確立を図り、また、地域人材との連携により多様な体験活動を設ければ、学習の基盤が整い、児童の主体的な学びにつながる。

## 3 研究の組織

